

雨がものすごい勢でふり出した。家の前にひばりがひいた(地われがした)。
「おとうちゃ、ここにひばりがひいたに――。」

くわおき場から牛小屋の前にひばりがひいて、おとうちゃと、おかあちゃは、家の前、おばあちゃと、おじいちゃは、くわおき場から牛小屋の前まで、足でひばり(地われ)の所をふみ、むろから、砂をもつて来て、ひばりの中へ入れ、ふんでは入れ、ふんでは入れる。それをいくかいかえしくりかえし、している。そのうちに、みつばちのすの前にはひばりがして、みつばちのすが、ずる、ずるとおちて行く。おとうちゃは、

「やーい、だれかこい。」とよんだ。

おかあちゃがとんできていっしょに運んだ。わたしと H は、ただ見て、ふるえているだけだ。電気はつかない。だから外にいるよりほかしかたがない。畑のこんやくは、見えているうちに、バタバタとこけていく(倒れていく)。

池もだんだんうずまってしまう。わたしは、何かしたくてもすることがなくただ二人で、ぼんやりと立って雨のふるのを見ているだけだ。その時、うらの山がくずれた。ドドド、ガターン、バリバリッとおふるの所(浴場)におちた。

「あ！おふるが。」とわたしはさげんだ。

「だいじょうぶだ。」とおじいちゃがいった。

わたしはあまり悲しくてなみだが出て来た。夜になった。家にはいつてろうそくをつけた。天じようから雨がポトン、ポトンとおちだした。みんな昼間あつたことを話してねた。うらの山がくずれてきたらどうしようと、心配で心配で、しかたがなかった。何時間たったか知らないが、ドッドッドド、ものすごい音をたててどこかがくずれた。家の前のはんばがくずれたと思い、おかあちゃと外に出て見たら、はんばではなかったのほつとした。おとうちゃは、カップをきて、見に行った。あとの人は、家の中にはいり、またねることにした。

H だけは、ぐっすりねていた。

「いいこと、何も知らなしねておるで。」とわたしは思った。

朝になった。わたしは、さっそくふるを見に行つた。その日は、おふる場の砂をはこび出した。わたしは、そうゆうことをすることがすきなので、手つだつた。みんな砂をどかして見ると、おふるはだいじょうぶだったが、たらいがめちやめちやにこわれていた。

(三十六年)